

疫禍の一滴

多田龍介

◆ 目次

こんな時に	5
午後	6
人のいない街	7
優しい笑顔	9
怠惰でいたい	10
僕らは無駄でできている	12
テンパーテンパー	15
キスの背景	17
僕が代わりに	19
失われた世代	20
心の病	22
ジャッジメント	24
愛しさほろり	26
宇宙人の灰	28
真実しか	30

河童の川流れ
放心したい
賑やか懐かし
夜中に切り離されて
放蕩息子
藪の中
これがそれ
理由ある反抗
老いも若きも
新しいもの好き
文字起こし
悼み
しわしわ
歩く僕らは
アルコール

56 55 54 52 50 48 46 44 42 40 38 36 34 32 31

こんな時に

夢さめやらず銘々の
悪夢の中で何をする

疫禍もチャンスに変えちゃって
できないことができるよに

会って確かめたかった人に
知ってたくさんありがとう

午後

何もかもをも手にしたつもり
これしか実入りはなくてでも

己を知るとはまだ見ない
持てる力を生きること

透明な蒸気のような
湯気に包まれ

強く強く

よくよく弱く

たなびく空のこいのぼり

人のいない街

誰もいない街 さびれゆく
もどかしい人との距離
彼方此方

いずれまた
戻れるだろうか
だが

水の流れが詰まり

つまらなさそうな
人らの群れに

ならないか生きないか

かかる苦難の下でも
笑顔でいたく痛い



優しい笑顔

優しい人の笑顔を見て
寂しくなり

しくしく泣く人の
苦しみを知りたく

すべてを救うすべもなく
手を揉みしだいて
我を忘れて

忘れちゃいけない
これからのこと

怠惰でいたい

非常時に結ばれたつがいは長続きしないといいます
非常時に別れたつがいは

戦時中、優しかった親戚のおばさんがある日どケチになって
などという話も聞いたことがあります

今の軋みを真に受けなくてもよいのではという気もし
しかし別れてしまったものは覆水盆に返らずで

家族に怒った？

そうですねそうですね

元の無理が祟ったのです
しかし僕は本来優しい

のんびりしたいなあとテレビを見ながら思うのでした

僕らは無駄でできている

高校生のころに休日の過ごし方か何かのアンケートを取り
その行動、必要ですかも聞いたことがある

いやな子供だった

行動には理由と必要があると思うがどうか
無駄に見えても

よく芸術は不要の部分でできていると言われる
しかし想像してみて下さい

脂身のないステーキを
遊びのないハンドルを

ここまで思い

芸術家は必要なのだと云った異国の首相に
ありがとうとこぼしたくなった



テンパーテンパー

政治家の無策は民衆の努力で賄う
民衆の努力は公文書に記載されず
手柄は皆政治家のものになるので
大変都合がいいそう。僕はも
っと怒ってもよい。なぜこんなに
従順なのかと考えるに稲作地帯だ
ったからではないだろうか。決ま
った時期に決まった収獲の見込め
る。天災や飢饉はあれど狩猟ほど
目測を誤ればパアということがな
い。という考察は横に置いておい
ても、僕らはもっと怒ってよい。



キスの背景

間接キスというのがある
キスでもよいのだが

あれはお前の唾液なら汚くないで
という決意の表れではないのか

他でもハグにしてもだ
君と俺とは運命共同体なのだ
という意思表示

とも言ってられない今
距離を取れとの世知辛い今を
絶海の孤島のように
生きている



僕が代わりに

手が荒れている

老いた母の代わりに家事をする

すべてやるわけではないが

洗い物をするとな手が荒れる

食の細くなった父に

僕と同じ夕食を出し

父は柿ピーで晩酌をする

柿ピーでよかったんだ

とやるせない気持ちになり

小さなころ面倒見てもらったんだから

と父母の体の心配をする

行き場のない僕ら

失われた世代

諦めにも近い感情があつて
失われた命は戻らないし
僕の気持ちも傷は消せないし

勝ちに行けば勝てるのですが
勝った後どうするのがあるし

革命の気運というのは
通行過程にしか快感がない

なんてこともわかるので
だから悪政放置でいいわけではないのですが

きれいな水もないのに
濁った水を捨ててしまえというものではないか

と為政者は言われる

けれどここにずっと前から
清水が湧いていたのです
知っていたでしょう

心の病

この国からはもうずっと前から
パタパタ人が消えていた

原因不明の病によつて
そして彼らは顧みられなかった

君はこの国の悪いところを上げる
しかし危機感を感じていなかった

夜中にプラプラ一人歩き
できたのだから

その危機が今、目に見える形に
顕在化しただけのことなのだ

昨日の樂觀主義者が

今日の悲觀主義者になるさまは

楽しいを通り越して

悲しい

ジャッジメント

うつろな目をした
まつろわぬ民

くつろぐ居間もなく
日々の暮らしは
とどめ置かれ

富ある者のみにある
救済か

うつつを抜かした
うつけの支配

下る審判
心配ない世に



愛しさほろり

価値がある

近くにこんな

涙を誘う

そんな時間を

過ごしたね

家で家族で話したり

喧嘩したりも

他愛なく

幸せなんだと

語れないけど

風の季節に

愛しさほろり

宇宙人の灰

見たことないもの

見つけたゝ

もつと知りたい

もつともな不思議

何もない日々

一気に崩れ

一揆も起こって

手に余る

呆れた大人に怒られて

消え入りそうに

こぼれてわびた

手には一握りの

真実しか

真実しか

こんな時節では

持ち寄れないので

突き詰める誠実

破滅するのは

恥ずべき瞞着

鋭く射す

あくどく血ドクドク

功徳を説く

河童の川流れ

オビニオンリーダーではない
ただの庶民が

圧迫され解決策もわからず
困窮したさまを綴っただけのもの

そう、誰振り回すこともなく
振り回されるだけの

しかし堪えた庶民の気持ち

それにも見るところはあるだろう

どうすればいいのかは誰もわかっておらず
僕も知りたい

僕にできるのは

一緒に溺れることくらいでございます

放心したい

こう困難な時代が続くと

人は判断を他人に放り投げたくなる

それも誰もがそろって一斉に

ひれ伏せる人を探してしまう

僕はそれが嫌だった

何たる知性の敗北か

しかし選択の自由は重荷なのかもしれないのだった

夕飯何が食べたいと聞いたとき

なんでもいいと返ってきたときのいらを

思い出していただきたい

あるいはデートどこ行きたいを聞いた時の
どこでもいいを

なんでもいい、しかし私の気に入るものを
ダメ出しだけは飛んでくる
そんな僕らの悲しい気持ち

賑やか懐かし

この騒動が終わったら

絶対に旅行に行つてやりましょうね、奈良さんっ
そうですとも、京都さん！

というやり取りがあつたかどうかは
定かではないが

そうして外に繰り出せば

懲罰的にまた巢ごもりを迫られたりして
という心配もあつて

蛇口の栓は固く締められすぎて

もう緩められなくなるかも

なんて懸念もあつて

ああ、僕は居酒屋で焼き鳥がまた食べたかった

夜中に切り離されて

丑三つ時に目が覚めて

雨はしとしと降っている

絶望的なこの気持ち

浮かれた夜がない

幼き日にはこの時間

ワクワクもしたものだがあ

きつと大人の秘密があるような

そんな期待があつたのだろう

しかし静かにしていよう

私の声はよくとおるので

笛や太鼓で人々の
眠りを妨げなんていけない

放蕩息子

楽しければ何でもいいんだよ、か
それはそうかもしれない

しかし僕は今楽しければ
酒を浴びるほど飲んでしまう

すると体を痛めるのは自明
快感原則に従っていたのでは自滅する

ここにきて人は自制を覚える
筈なのだがしかし

覚えられないこの愚かさは
何ともできないこの気持ち



藪の中

他人と関わるのが怖いというか
面倒というか

他人とは未知の暗黒大陸であり
危険一杯のような気がして

SNSで気軽に人と付き合えるようになった分
素性も知らない相手に
若い子はわりと無防備すぎやしないかと
いぶかり

まあそれで実際会ったりはしないんですけどね
というわけで
インターネットって世界とはつながってるけど
世間とはつながってない感じがするね

という言葉は至言であると噛みしめるのだった

これがそれ

これがそれだとわからないことがある
渦中にいると

女性と話す

恋人になりうるとは夢思わない

裸を見せ合う

映像作品と違うが

これがそれだとわからないことがある

今が時代の転換点であつたと

過ぎたらわかるだろうか



理由ある反抗

手が荒れている

ピリピリ痛い

口の中はこないだ出来立ての

肉じゃがを食べて

火傷してしまった

内臓は始終傷んでいる

これだけ痛ければ

多少不機嫌になっても

何もおかしくない

といって僕らの怒りが

すべて身体的起因を持っているとするのは

早計だが

さあ僕らの怒りの原因を
見つけてもらいなさい

老いも若きも

子どもの成長するとは

できないことができるようになっていく過程

年寄りの老いるとは

できたことができなくなっていく過程

やりたいのにできなかったら

苛立ち怒ってしまう

おりしも時はIT革命時

若者の使う機器はよくわからず

自分の培ってきた技術も

忘却されてしまう

耳が聞こえなくなったり
目が見えなくなったり

そんな気持ちも汲める年下でありたいと
願うんだよ、辛抱たまらなくても

新しもの好き

僕らがパソコンやスマホで

カタカタスイスイやって悦に入っているのと同じように

父母が若いころは

車やラジオを使って俺たちすげえの気分を

楽しんでいただろうし

活版印刷が成って

小説を読んでいたころの人達は

新世界、私たち、ああ！　と思っていただろう

そして反省の時期が来たりして

繰り返し繰り返し繰り返して

人類はどこに行くのか

見当もつかない



文字起こし

中傷

酷いことだよな

民衆から下世話なゴシップを取ったら
何が残るのか

噂はあまりに荒唐無稽な姿になっちまって
もはやなんだかわからない

昔からそうだったし

人の悪口は絶えなかっただろう

しかし今のように文字起こしされると
厳しいものがある

分別のつかない若人が書いても
破壊力は等価だ

新技術に酔ったのだ、民衆は
力を持ったのならそれを自覚せねば

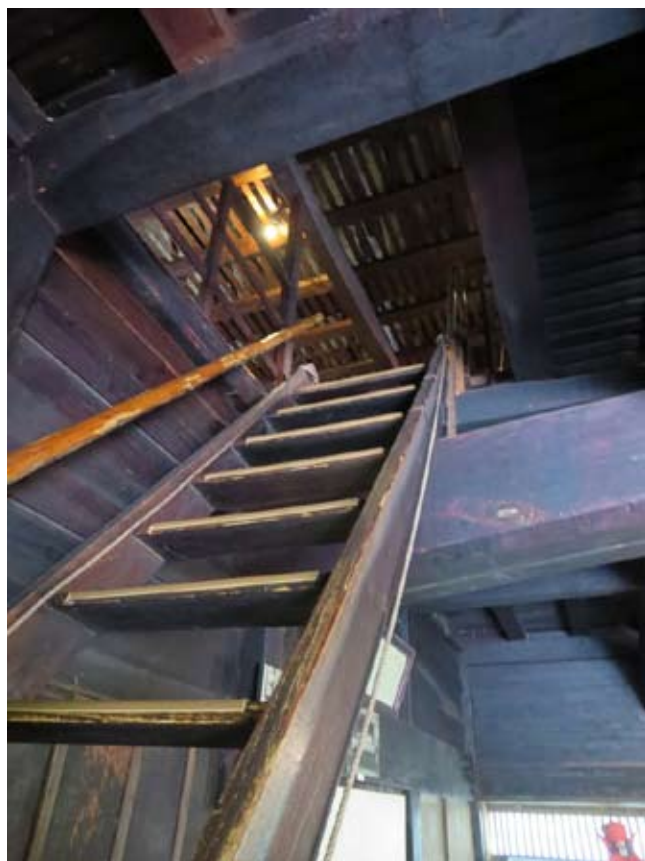
悼み

悲しくないね
泣かないね

しんみり沁みこむ
涙にぼろり

何に試され打ちのめされて
そうして倒れて行けるのか

夜のただなか
昼を待たずに



しわしわ

私たちは

たわしのように擦られて

しわしわの心になりまして

なんか疫禍で看過できない

馬鹿を庇ってきたのだと

皆さんの苦勞を

満たされぬ苦しみを

痛いほどわかる人を

見たいと思う

歩く僕らは

世界の果てにも
政界の果てにも
異界の息吹の
吹き込むことよ

儂くはない
手に余るとも

どこに行くのかわからぬが
戻れないのはいつも同じで

なじる言葉もそこそこに
意気地振るわせ

歩く僕らは

アルコール

そんなことより今朝の朝食をどうしようか
静かです

しょうが焼きができるね

With drink? No drink.

と言えればいいのだが

飲むべきか、飲まざるべきか
それが問題だ、いつだって



あとがき

この詩集に収められた詩は二〇二〇年五月にまとめて書かれた。そう、コロナの疫病自粛中である。この疫病は僕たちの世界観をわりとこっさりひっくり返して、生活様式まで変える勢이었다。といっても僕たちはもう年を取りある程度出来上がった人間だったので、また元の生活に戻ればいいなあというくらいの感じで巣ごもりをしていた。

写真は二〇一五年に父と金沢、白川郷、飛騨高山へ旅行に行った時のものである。白川郷は限界集落だったところが観光で盛り返した村であるようだ。人のいない村から賑やかさを取り戻せたらよい。

困難から拾ってきた一編の詩集を、どうぞ見てもらいたい。

多田龍介

疫禍の一滴



令和二年五月三十日 初版発行

著者	多田 龍介
発行者	多田 龍介
発行所	明水工房

©Ryusuke TADA 2020

